学生の戦争観・平和意識と立命館大学国際平和ミュージアム

森下　徹

はじめに

私は立命館大学で「現代日本の政治」、「平和学」などを担当（非常勤）し、いずれの講義においても何らかの形で国際平和ミュージアムを利用させていただいている。この分科会の趣旨や講義内容からいって「平和学」における実践報告を行うのが一番適当だが、「平和学」は、シンポジウム直後の開講（夏期集中講義）であったため、この小論では2002年前期に担当した「現代日本の政治」の実践を紹介し、学生の戦争観や平和意識について検討したいと思う。なお、紙幅の関係もあり、平和ミュージアムの活用に関わる点を中心に報告することとする。

1．講義のねらいと進め方の工夫

「現代日本の政治」は、立命館大学文学部・産業社会学部開講の一般教育科目である。いわゆる「大講義」で、授業には350余人が登録しているが、実際には毎回150～200人前後が出席し、およそ280名ほどがレポートを提出した。大半は１、２回生である。

2002年は、講和・安保両条約発効からちょうど50年、講和条約第３条によってアメリカの占領下に置かれた沖縄が返還されてからちょうど30年、また、講和条約は中国抜きの講和となったが、その中国との国交が回復してちょうど30年という節目の年であった。そこで、講義のテーマは「戦後日本政治の原点と現点―憲法・安保問題から見た戦後政治史―」とし、戦争や平和にかかわる現代政治の諸問題（現点）を、戦後政治の出発点と展開（原点）をふまえて歴史的に検討するというスタイルをとった。

シラバスには、講義のねらいについて以下のように記した。

「2002年は、戦後政治を規定し続けてきたサンフランシスコ講和・日米安保両条約の発効からちょうど50年を迎える。本講義では、安保問題を中心として、戦後政治のあゆみをふりかえり、戦後政治の原点や構造を確認し、そのうえで、９・11以後の世界情勢の中で日本の戦後政治が、どう変化しつつあるのか、テロ特措法、日の丸・君が代問題、小泉内閣、構造改革など、出来るだけ時事的な題材を取り上げて受講生とともに考えたい。」

授業は、大講義であるためどうしても一方通行になりがちである。できるだけ学生の意見を引き出し、双方向の授業としたいと思い、いくつかの工夫を行った。その一つが、賛否両論あるかも知れないが、講義では多様な見解を紹介しつつも、あえて私の意見を鮮明に打ち出すよう心がけたことである。その際、結論だけ提示するのではなく、なぜ私がそう考えるのか、その論拠となる史料や情報、文献などをできるだけ詳しく紹介するよう努めた。ちなみに、テキストは用いず、１コマにつきＢ４片面程度のレジュメとＢ４両面程度の史料を配布した。これまでの講義の経験から、はっきり私の意見をのべることで、逆に学生の意見を引き出しやすくなるのではないかと考えたのである。

しかし、そのやり方では教員の見解を一方的に押しつける講義ともなりかねない。そうならないようにするためには、教員への反論をふくめて、多様な意見の表明が保障されなければならない。そこで工夫した点の２点目だが、毎回の授業でコメントカード（Ｂ６）に無記名で質問や意見はもちろん、講義内容に対する反論などを記してもらったことである。そのうち主要な意見については翌週Ｂ４両面（40人前後）にプリントして配布し、授業の冒頭10分から15分程度時間をとって、補足の説明やコメントを行った。コメントカードは５章で紹介しているようにたいへん好評で、無記名で出席点にはならないにもかかわらず、多くの学生が毎回熱心に記入してくれた。選ぶのに大変苦労したが、私の見解に対する反論と質問、他の学生のカードに対する意見は必ず採用するようにした。反論を歓迎したことは、少なくない学生に「驚き」をあたえたようだが、そのことは私には多少の「驚き」でもあった。当初は、「教師と異なる意見のカードやレポートを書いても単位はもらえるのか」という趣旨の質問もいく

つかあったが、２、３回と授業が進み本当に反論してもかまわないと分かると、多くの批判や率直な疑問が寄せられるようになった。「偏っている」、「左翼だ」、「自虐的」といった類の批判もあったが[1]、私自身もうまく答えられない質問や再反論するのがなかなか容易でない反論が寄せられるなどたいへん勉強になった。また、私への意見・反論だけでなく、他の学生の意見への批判や共感も多く寄せられ、学生間で「紙上討論」に発展したケースも少なくない。

３点目は、学生に報告してもらう場を設けたことである。毎年、開講時にアンケート調査を行っている。これは講義で取り上げる予定のテーマに関する学生の意識動向を把握することが第一の目的だが、その集計を学生有志に依頼することで学生の講義参加のきっかけをつくることも意図している。この講義を担当して４年目、アンケートを実施して３年目となるが、開講時に呼びかけると毎年10人ほどの学生が集計の手伝いを申し出てくれる。今年も10人ほどが協力してくれたが、ほとんどが文学部の１回生であった。今回は、数字の集計と自由記述欄のワープロ入力だけでなく、その分析も含めた結果報告を講義でしてくれないかと頼んだところ、積極的に引き受けてくれた。そこでアンケートの内容を「憲法」、「９・11テロ」、「日の丸・君が代」の３つに分け、それぞれ３～４人の班をつくって検討し報告してもらった。大勢を前にした発表で緊張していたうえ、報告内容はアンケート結果の分析よりも、自分たちの意見を主張することに力点が入りすぎたきらいもあるが、各班とも充実したレジュメを準備するなど、他の学生にも概ね好評であったように思う。

２．講義内容とレポート

講義内容は次のとおりである。

Ⅰ　戦後政治の原点
- 1-0　イントロダクション　アンケート（4/5）
- 1-1　新憲法の制定（4/12）
- 1-2　東京裁判と民衆の戦争観・戦争責任観（4/19）
- 1-3　靖国参拝問題（4/26）

Ⅱ　戦後政治の形成
- 2-1　朝鮮戦争と講和・安保（5/10）
- 2-2　自衛隊・米軍基地・沖縄（5/17）
- 2-3　安保闘争と自民党政治の転換（5/24）

Ⅲ　戦後政治の現点
- 3-1　湾岸戦争と新ガイドライン（5/31）
- 3-2　核密約（6/7）
- 3-3　「日の丸・君が代」問題の歴史的検討（6/21）
- 3-4　アンケート結果報告
  - 学生有志による発表（6/28）
  - 私からのコメント
    - ９・11テロ問題を中心に（7/5）
- 3-5　有事法制と日本国憲法（7/12）
- 3-6　21世紀日本政治の行方（7/19）

このうち、1-3靖国参拝問題は、小泉首相が４月21日に靖国神社参拝を行ったため、直後の授業で取り上げた。また3-2の核密約問題も当初の予定にはなかったが、安倍官房副長官や福田官房長官の核保有や非核３原則に関する発言が問題となったため、急遽取り上げたものである。そのため、戦後史の展開をふまえるといっても、1960年安保改定前後までとなり、70年代、80年代は割愛せざるを得なくなった。また、当初予定していた、歴史教科書問題や構造改革・新自由主義、小泉内閣をめぐる問題なども取り上げられなかった。

この講義の評価は、中間レポートと期末レポート[2]によるが、中間レポートは平和ミュージアムの見学を課題とした。そのきっかけは、５月17日の講義で沖縄返還30年にあわせて、「2-2自衛隊・米軍基地・沖縄」として、講和後の再軍備や沖縄を中心とする米軍基地の問題を取り上げた際、次のようなコメントカードが寄せられたことにある。

１）露骨に言って失礼かもしれませんが、史料９（沖縄米軍用地強制使用裁判での沖縄県第一準備書面、沖縄戦の歴史や「命どう宝」の精神を説明した部分―注森下）を読んでいて僕は思わず笑ってしまいました。僕にとってみては「戦争を憎み平和を愛するこころ」というのは、まさに戦後日本に流通した「ありきたりの政治スローガン」以外の何物でもないからです。しかもそれを日本国内において陳腐なものとするのに飽き足らず「人類普遍の願い」などという言葉で世界中の人々にとっても「ありきたりのスローガン」とすることをもくろんでいるのかとさえ思えてきます。(5/17コメントカード、以下コと略)

翌週この意見を紹介し、「命どう宝」や「戦争を憎み平和を愛する心」は陳腐なありきたりの政治スローガンなのか、戦後の原点である平和や民主主義は、陳腐なありきたりの政治スローガンなのかどうか、それまでの講義と平和ミュージアム見学をふまえて、みなさんはどう考えるかと問い、これを中間レポートの課

題とすることとした。

その際、戦前戦後の連続と断絶という観点から平和ミュージアムを見学してほしいと補足説明したのだが、かえって連続と断絶とはなんのことかよく分からないとの質問が寄せられた。そこで、あらためて中間レポート課題を以下のように示すとともに、あわせて参考資料として『毎日新聞』2001年８月15日付社説「戦後の原点を考える日に」を添えた。

レポート課題

「戦後政治の原点」（平和・民主主義）について

どのような歴史的経緯（戦争体験）のなかで生み出されたものか、また今日その原点とどう向き合うべきか（活かす、改革・発展させる、もしくは否定すべきか）、平和ミュージアムを見学したうえで、意見を述べよ。

レポートを読むと、明らかに見学せずに書いてあるものもないではないが、大学入学時にクラス単位で見学した時とは異なり、問題意識を持ち、それなりの時間をかけて見学し、場合によってはボランティアガイドさんの解説や戦争体験を聞くことで、新たな発見をしたという学生が多かったようである。大学に充実した平和ミュージアムがあり、講義にすぐ活用できるありがたさを実感した。中間レポートの詳しい内容は、４章で紹介したい。

３．開講時のアンケート調査から学生の戦争観・平和意識の一端(1)

本章と次章で、開講時のアンケートや中間レポート、毎回のコメントカードを素材に、学生の戦争観・平和意識の一端を紹介したいと思う。まず、開講時のアンケートだが、結果は以下の表の通りである。

「現代日本の政治」アンケート結果

2002年４月実施　286人（男160、女114、不明12）

単位は％

１．小泉内閣支持率と政党支持率

	2002.4	2001.7	2001.4
支持	31	61	11
不支持	64	37	85
その他	5	2	4
自民党	7	21	7
保守党	1	0	1
公明党	0	1	3
民主党	5	8	9
自由党	1	3	3
共産党	8	6	5
社民党	5	2	2
その他	1	1	2
支持ナシ	69	59	68

＊2001．４は森内閣

２．９・11テロについて

許されない	72
やむを得ない	17
その他	11

３．アメリカの武力報復攻撃について

	全体	男性	女性
賛成	19.4	23.8	16.8
反対	70.8	64.6	74.3
その他	9.9	11.6	8.8

４．武力報復によってテロはなくなるか

なくなる	1
なくならない	95
その他	4

５．自衛隊のインド洋派遣について

	全体	男性	女性
賛成	23.1	29.5	9.4
反対	65.4	59.6	78.3
その他	11.5	11.0	12.3

６．有事法制について

	全体	男性	女性
賛成	29.4	40.6	13.9
反対	48.4	44.1	53.5
その他	22.2	15.4	32.7

７．日米安保条約について

	全体	男性	女性
賛成	37.1	40.7	31.7
反対	40.7	41.4	38.6
その他	22.1	17.9	29.7

８．憲法改正について

	全体	男性	女性
賛成	44.8	49.4	42.6
反対	26.6	25.3	29.6
その他	25.2	25.3	27.8

９．憲法第９条の改正について

	全体	男性	女性
賛成	32.5	36.2	28.9
反対	49.3	49.4	52.6
その他	18.2	14.4	18.4

10．国旗を日の丸、国歌を君が代としたこと

日の丸	賛成	51.1	君が代　賛成	36.6
	反対	27.0	反対	43.8
	その他	22.0	その他	19.6

※合計が100％にならないところもあるが、学生の集計のままとした。

アンケート結果の特徴点をいくつか指摘しておこう。

①小泉内閣不支持は64％にのぼり、支持率31％の２倍以上となった。ちなみに昨年の講義（2001年７月）で同様のアンケートを行った際は、支持が６割を越えていた。また、支持政党は７割近くが支持なしであった。自民党の支持率は、昨年のアンケートでは、小泉内閣成立後７％から21％へと急増していたが、今回は７％へと低下している。

②テロについては17％の学生がやむをえないと答えているが、それは、テロという手段を肯定しているというよりも、テロに訴えたくなる心情やアメリカを批判する気持ちについては理解できるということであろう。

２）アメリカの一人勝ち的な現在の状況が持たざる国へのしわ寄せを招き、その憎しみが大国にぶつけられた様に思う。手段は間違っているけど、テロリストが言わんとすることはわからなくも無い。でも、暴力から生まれるものは新たな憎しみと深い悲しみしかないと思う。（アンケート自由記述欄から、以下アと略）

③次にテロに対するアメリカの武力報復攻撃、および自衛隊の派遣など日本の戦争協力については、３分の２以上の学生が批判的な見解を持っていることがわかる。また、報復によってテロがなくなると考えている学生はわずか１％であり、アメリカの報復攻撃を支持する学生であっても、報復攻撃によってテロをなくすことができるとは思っていない。

３）アメリカはなぜテロが起きたのか考えようとしていない。それがわからない以上、どんなに武力報復しようともテロはなくならない。一方的にテロリストを悪人にする事によって自国の正義を主張する姿勢も問題。これまでの外交政策に含まれる原因に立ち向かい、話し合いによって和解する以外に解決の方法はない。数十年という時間がかかるだろう。（ア）

４）テロは許される事ではない。しかし、テロが起った背景には構造的な問題があるはず。それに対してアメリカは単に武力攻撃を行った。その点について、本当に武力でテロも押さえれば済むのかと疑問を持った。それに、対テロリストではなく対アフガンだった。何も関係ない貧しい人々を戦火に巻き込んで良いのだろうか。残念なのは過去に原爆を経験した日本までもが一緒になって戦ったことだ。（ア）

５）ブッシュが戦争として始めた一連の軍事行動に後方支援として自衛隊が加わるのは納得いかない。自衛ではなく、自分から進んで派兵しているのだから、軍隊だと中国から指摘されるのだ。日本は戦争を放棄したのだから最後まで守り通して欲しい。アメリカがこの憲法をつくったのだから、再軍備を求める立場にないはず。（ア）

６）あれ以来アメリカが嫌いになった。自分達がしてきたことを棚に上げて「USA」を連呼。爆弾を使えば使うほど支持率が上がり、軍需産業は儲かる。外国人を殺すことを食い物にする連中のパシリであることが情けない。今の僕は反米主義です。（ア）

④有事法制については批判的な見解が多数を占め、日米安保も反対が賛成を上回る結果となった。その一方で、改憲に賛成する意見が反対意見を大きく上回っている。９条に限ってみると改正反対が多数とはいえ、３分の１近い学生が９条改正に賛成している。質問３～９の回答の関係を詳しく見てみると、有事法制や安保に反対し、９条改正に賛成しているものが一定数存在することがわかる。詳しくは後述するが、有事法制や安保反対の理由には、９条を支持し平和を求める立場からの反対と、対米追随を脱するため９条を改正し自立した軍事力をもとめる立場からの反対があるようである。なお、９条改正賛成派の中には、次に紹介するように９条を支持し、より徹底させる立場からの賛成意見もいくつかあった。

７）解釈改憲を何度もされるから…戦争行為を全て廃止する内容で、どうとでもとれる事のないはっきりしたものに変えた方がよい。（4/19コ）

⑤最後に指摘できる点は、明らかな男女差がみられる項目があることである。たとえば5．自衛隊のインド洋派遣では女性の方が2割ほど反対が多く、6．有事法制の賛成率は女性の方が26.7%も低い。女性の方がより現状に批判的で平和を求める傾向にあるといえよう。これは今年の講義だけの特徴ではなく、毎年のアンケートでも確認できるし、マスコミなど一般の世論調査でもこうした傾向がみられる。

以上、概観したように、学生の間では、アメリカの武力報復や日本の戦争協力など現状に対する批判的な意識が強く、反米観・嫌米観や日本の対米追随に対するフラストレーションが急速に高まっていることがわかる[(3)]。

では、こうした日本政治の現状をどうやって打開しようと考えているのだろうか。その方向性については、「対米自立：大国派」とでも名付けられるような意見と「対米自立：平和・9条派」というような意見とに大きく分かれているように思われる。もちろんアメリカの報復や自衛隊派遣、有事法制、安保などを支持する学生も少なくない。学生の意識傾向は平和・安保問題に即して単純化すれば、「対米自立：大国派」、「対米自立：平和・9条派」、「現状支持派」の3つに大別できよう。「対米自立：大国派」は、アメリカを批判しつつも、アメリカの力の源泉を核や軍事力にあるとみて、対米追随を脱するために日本が改憲し自前の軍事力を持つことを主張している。こうした反米・嫌米、対米自立・大国化というような主張は、毎年の講義から受ける私の印象では、この2、3年で急速に増大しているように思われる。

4．中間レポートとコメントカード
学生の戦争観・平和意識の一端(2)

開講時のアンケートで見られた反米・嫌米の傾向は、中間レポートや毎回のコメントカードでも確認できた。そこでは、「憲法の平和主義や戦後民主主義、戦後日本人の戦争観や平和意識は、アメリカの押しつけの結果であって、そこに日本がアメリカの言いなりとなっている原因、対米追随の原因がある。憲法は確かに理想を謳っているかもしれないが、現実にはアメリカの要請で再軍備され、自衛隊が存在するという欺瞞に満ちたものでしかなかったのだ」といったような主張が数多くみられたのである。つまり戦後政治の原点はアメリカによる日本の占領にある、対米追随の原点は憲法第9条や東京裁判、アメリカに植え付けられた日本人の平和意識にあるという見方である。

8）日本が米国に敗戦してからというもの、米国の意のままに操られているのではないだろうか。東京裁判において米の独善的な判決。GHQの民主化政策。日本という国の主体性はこの時点で失われ、…憲法第9条によって日本は骨抜きにされたのだろうか。（中間レポート、以下中と略）

9）アメリカの巧みな日本占領政策が功を奏し、東京裁判史観が根付き、戦後民主主義が育ち、平和条約締結以後もその方向性は進歩的文化人やそれに迎合するマスコミなどによって引き継がれ、今や立派に日本で実を結び花咲いた。原爆投下国に対して「過ちは繰り返しませぬから」と謝り、時の首相をして「あの戦争は侵略戦争であった」と明言させ、国会が謝罪決議をするのは、戦後政治、戦後教育の偉大な成果であろう。しかし、敗者自身が過去を過剰に反省し、民族の誇りを捨て、かつての伝統や美徳をすべて否定し去ることはいかがなものだろうか。（中）

10）戦後政治の現点として東京裁判が挙げられると思う。戦前の軍部が支配していた政治を完全な悪として国民に意識づけさせることで戦後の政治を一新させようとする意図があったと思う。しかしこの東京裁判は…裁判官の構成も11人すべてが日本の敵性国であるアメリカ、イギリス、支那、ソ連から出ていたのだ。これは国際裁判というよりも復讐裁判ということができるのではないか。…日本の思想界や言論界、教育界において占領軍が植え付けた東京裁判史観が根を張り、左翼政党を支える史観として利用された。…そして現在も日本人は、このときに植え付けられた「反戦平和主義」を引きずっているのではないか。個人主義の確立を叫びすぎたあまり、今の日本人の中には「公共性」に欠けた人々が増えているのではないかと思う。（中）

11）大戦を主に指導したA級戦犯にとどまらず、BC級1000人以上も断罪が下されたままである。そのため大戦中の歴史に対して全く肯定的にとらえられず、またそこから生まれた平和主義が…アメリカ的民主主義とセットで日本社会に定着していったのだ。教育者が「戦争はいけないこと」と教えることで、この平和主義的人間は再生産されてきたのである。この「戦争はいけないこと」という考えで思考停止してしまっているのが今の日本ではないだろうか。小中学校で祖父母から戦争体験について聞いてくるという宿題があったが、これこそWGIP[(4)]のなごりの一つであろう。（中）

では、その打開はどこに求められるか。対米追随の状態を脱するためには、9条を改正し、自前の軍事力

を持つ「普通の国」となり、軍事力を背景にアメリカや世界にはっきりものの言える国になる必要があり、安保も廃棄するか対等な条約に改正する必要があるという主張につながっていく。開講時のアンケートで安保廃棄が多数を占めたが、そこには憲法９条の立場、平和を求める立場からの安保廃棄と自前の軍事力を求める立場からの安保廃棄論があったのである。なお、有事法制反対の理由にも同様に２つの傾向がある。

12）戦後日本の政治を影ながら操作していたのはまぎれもなくアメリカだったのだ。…アメリカから脱却する必要がある。…アメリカ軍に出ていってもらうためにも、必然的に自衛隊の強化は否めないのではないか。(中)

13）軍隊を持つことで今までのアメリカに頭が上がらなかった日本の態度も改善できるのだ。(中)

14）今の日本の平和主義は米に依存しており、他力本願的であるといえる。やはり一つの独立国として最低限の自衛力は持つべきではないのか。中には現実に我が国が侵略を受ける危険性などないから、第９条の改正など必要ないという人がいるが、これはあまりにも楽観的な考えである。…日本は自国の軍隊を統御することに自信がないあまり、自国の独立を事実上否定してしまっている。(中)

15）自衛隊を正式な国軍に昇格させ、自衛戦争を合憲とすべきであり、憲法改正は是非とも必要である。もちろん戦争などないほうがいいし、無意味な侵略戦争は起こすべきではない。ただ理想主義だけでは平和なんてあり得ない、国民を守るための憲法なのだから自衛力ぐらいもつべきである。(中)

16）有事法制の本当の目的はおそらく日本の生命線とも言えるシーレーンの確保にあるのではないだろうか。日本本土を侵略できる国はなくとも、輸送路破壊程度ならば北朝鮮の不審船でも充分である。…しかし今回の有事法制がアメリカの協力のためであることも一面では事実だろう。また議論不足の感も否めない。しかし日米安保では日本の対米協力は明記されていても、日本国民や在外日本企業を守る義務は米国にはない。だから私は条件付きで有事法制を容認するのである。条件とはアメリカの犬になるのは断固拒否するということである。(7/12コ)

また、戦後日本人の平和意識の大きな特徴のひとつであった、軍や軍事力に対する不信・懐疑の念、戦争に対する拒否感も急速に薄らぎ、「武力・軍事力による平和」を肯定・容認する気分も広がりをみせているように思われる。

17）戦争＝「悪」ではない。たとえ日本が戦争できる国になっても別に悪いことではない。大東亜戦争の時、世界が国際法を破って戦争をしたから一般民衆を殺してしまう惨劇な戦争、「悪」な戦争としてのイメージがあるだけだと思う。戦争は本来「話し合い」で交渉がまとまらない時に行う一つの外交手段であり、国際法を守れば戦争も全然悪くないと思う。だから日本が戦争をできる国になっても全然イイと思う。(4/19コ)

18）日本に軍事力は必要だと思う。なぜなら極東は戦後からずっと不安定でそのまま今にきているからだ。そんな不安定の中で武力を持たないことは相手にとってこれほどのことはないのだ。そのため今まで軍事力というカードが（日本は）使えず、また、（相手国に）使われてきたと思う。軍事力で外交しようとする国にはそれと対等以上の力を持つ必要がある。外交は食うか食われるだ。(4/19コ) ※（　）内は森下注

19）国際政治の場においては、戦争が外交の延長として厳然と存在している事実を冷静に受けとめなければならない。他国を侵略することはゆるされないが、自国を守るための軍事力を保持することはしかたのないことであり、国民に再び戦禍を味あわせないためにも必要な措置である。ここで日本独自の非武装平和主義が問題となるわけだが、前述の理由でこれは改めるべきであり、本来の平和主義とも何ら矛盾するものではない。(中)

20）非武装主義は一見とても魅力的である。…だが、そのような国は独立国と呼べるだろうか。非武装の国は軍隊を持った国との交渉において限りない譲歩を強いられる。現在の国際関係は軍事力によって保たれている。そして最も強力な軍事力を持つアメリカの意志が世界の意志となるのである…国家は独立を維持するためにはやはり軍事力を持たなくてはならない。国家間の紛争を公平に解決してくれる国際警察や国際裁判所のようなものがあれば話は別だが…現状からいって望むことはできない。無理に作ろうとしてもおそらくアメリカを中心としたものになることは目に見えているので、むしろ有害な結果をもたらすだろう。(中)

21）私は自衛隊はなくてはならない存在だと考えている。災害時の救助活動はいうまでもなく、自国の防衛のためにも必要だ。他国の紛争解決のために派遣されるのも問題ない。…自分の国だけ平和でいいのか。いまどこかでおきている戦争を無視することは平和主義とはいえない。…積極的に平和的解決に参加して「日本には平和に貢献するこんなにすばらしい自衛隊があ

るのだ」と世界の国々に誇れるようになればいいのだ。そのためにも改憲するなりして定義をおくといい。有事法も効果あるものを期待したい。いくら不戦の形をとっても、話の通じない相手もいる。今の状態ではミサイル一発で日本は滅ぶ。緊急事態に政府はどう対処するのかを早く明確にしてもらわないと不安である。現在になっても沖縄の米軍基地、靖国神社、歴史認識など戦争に関する多くの問題を抱え込んでいる。だから日本はまだ原点にいるといってよい。原点と向き合うことは、現在の状況とも向き合うことでもある。そしてそれは未来を見つめることが重要になってくる。戦後60年も経とうとしているのに、いまだに自虐的になることはない。歴史的事実でないことまで受け入れる必要もない。戦争責任も大切であるが憲法の中に歴史を見るよりも、将来性・必要性を見ることに重点を置かなければ、いつまでたっても原点から出発できない。(中)

なお、この軍や軍事力、戦争に対する不信・懐疑の念の低下は、ある学生が「最近小林よしのり氏の思想に影響された若者が増えているということは覚悟していたが、よしりん派でない生徒の中にもたくさんの戦争肯定派がいることには驚いている」とコメントカードを寄せたように、９条を支持し平和を求めるという学生の間にも広がっている点にも注意する必要があろう。

22）私は憲法９条が素晴らしい憲法だと思う反面、もしアメリカのようにテロに遭遇して何百何千何万もの命が失われたらどうなるのか、とも考えている。ありきたりな考えかもしれないが、きっとアメリカとまではいかないけれど、国民の間からテロリスト殲滅とか、自衛隊を派遣しろとかの声が挙がるに違いない。それが自然な人間の感情だと思う。有事法制はとてもきな臭くて廃案になることを願っているが、それに代わる規定も作った方がいいのではないかとも思ってしまった。私は矛盾しているだろうか？（7/12コ）

23）憲法改正はすべきではない。なぜなら、戦後直後にできたこの憲法は何のしがらみもない状態で単純に考えた国の理想であり、国の価値観だからである。…現実に憲法をあわせていくのでは憲法の意味はなくなるし、国のすすむべき道が見えなくなる。憲法に現実をあわせていくべきものなのだ。とはいっても、この核兵器があふれ、軍備縮小といいながらまだ軍備の強化が図られている世界の中で、軍隊や核兵器を持たないというのは非常に危険なことである。だから私達は憲法はそのままで、核兵器は持たず、なおかつ自衛隊は持っておけばよい。ただ現在のようにあいまいなままで持っておくのではなく、自衛隊は軍隊であることを明確にし、世界で本当に核兵器がなくなったそのときに軍隊を廃止することを誓うべきだ。いくら戦争をしないといっても自衛手段がないのは危険すぎる。これからの日本の政治において、敗戦によって得られたこの現代日本政治の原点である平和主義・民主主義を、私たちはもう一度思い出し、大切に守りながら現実に合わせていく努力をすべきである。(中)

また、国際紛争を話し合いなどによって平和的に解決しようとする姿勢に対しては、「頭を下げてばかり」、「なめられる」といった批判が加えられる。

24）よく「まず話し合いを」ということをよく聞くが、宗教、生きてきた環境など全く違った人達と分かり合うことなど不可能に等しい。日本の憲法の平和に対する考え方は素晴らしいが、やはり自国や自国民を傷つけられるようなことがあれば報復、制裁は当たり前だろう。先に述べた話し合いだとか、そういう教育が子供をしかれない親などが出てきたことと関係あるのではないか。(5/17コ)

25）法案の内容についてはあいまいさや古さなどは否めないが、自分の国は自分で守るということは果たして許されないことなのか？有事法制に対して反対の立場の人に私は聞いてみたい。じゃあ、日本はどうやって自国を守る訳？日本を守るために基地をかまえているわけじゃないアメリカ軍がまもってくれるのか？装備だけは最新鋭だが動く為の足を持たない現在の自衛隊が守ってくれるのか？そして彼らは言う。「憲法九条を守れ」、「戦力を持たない」、「憲法は交戦権を否定している」と。確かに戦争という悲惨なことを否定し、平和を目指すという内容はすばらしい事であり、全世界に対して日本国が誇るべきことであるがそれだから日本は国を守る事すらできないのか。「話し合いで解決する」、「頭下げてりゃいい」そんなんでいいの？(7/5コ)

26）北朝鮮が韓国の領海への侵犯と韓国軍への攻撃を行い、韓国軍に多数の死者が出た…金大中の太陽政策を支持している人は日本も同様に無抵抗を貫き、死者が出ても笑顔で平和憲法をアピールしてさえおけばなんでもうまくいくというのか。(7/5コ)

27）中国の日本領事館に北朝鮮の人が亡命を求め、中国警察が治外法権を破った事件についてどう思いますか。私は日本が世界からなめられているとしか思えません。他国だったら中国の警察を館内に入れないし、中国側も入ってこないと思います。(5/10コ)

このように、対米追随を脱するため、安保を廃棄し、憲法を改正し、自立した軍隊を持ち、「戦争のできる」いわゆる「普通の国」になるよう主張し、平和を求める意見を軟弱だと攻撃するような意見や気分が、急速に高まっている。中間レポートの２割程度はこうした意見であったように思う。

ただし、15）や19）の意見にみられるように、「対米自立：大国派」は、侵略戦争には反対しており、軍事大国やふたたび戦前のようなファシズム国家となることは拒否するともいう。アンケート結果報告で憲法９条を担当した班は、私が「対米自立：大国派」と名付けたような改憲や徴兵制を求める意見を「自国防衛派」、「実践的平和主義」とまとめ、彼らも「対米自立：平和・９条派」もみんな戦争反対・平和を求める点では共通していると報告してくれた。その際の平和とは「軍事力による平和」であろう。９条の「理念」についてはあくまで支持しつつも、専守防衛＋国際貢献としての自衛隊、外交交渉の背景としての自前の軍事力を憲法に明記する必要があるということであろうか。

この対米観や15年戦争・東京裁判・占領政策の評価などに、小林よしのり氏や「つくる会」の影響力を見ることは容易である。一例を挙げると、「東京裁判史観」、「WGIP」、「大東亜戦争」など、講義中では使っていない「用語」が、多くのコメントカードやレポートに登場することに表れている。とくに、日本史や東洋史など歴史専攻学生の間に確実に影響が広がっているように思う。また、こうした主張を必ずしも支持はしない学生の間にも、「東京裁判史観」「大東亜戦争」「南京大虐殺否定」「自衛戦争」「アジア解放戦争」などの主張もひとつの学説・意見として取り上げるべきではないか。それが中立・公正な態度ではないかといった空気があり、学問的にすでに破綻した説・主張が、教室で「復権」している状況がみられる。

では、彼らは、平和ミュージアムをどう見たのだろうか。平和ミュージアムの展示も「東京裁判史観」にたつ偏った展示に映ったのだろうか。昨年の講義や他の講義ではそういった感想を寄せた学生もいた。今回、「対米自立：大国派」の学生の中間レポートから、平和ミュージアムの感想を直接読みとることはあまりできなかったが、ひとつだけレポートを紹介しよう。

28）平和ミュージアムを見学して思ったのが、パネルの数だ。ほんとかどうか知らないが、親日国家だといわれている台湾と朝鮮のパネルが植民地というテーマのところに掲げてあったが、台湾のパネル１枚に対して朝鮮は２枚。とりわけ大したことではないかもしれないが、なんとなく目に付いたので挙げておく。あと「アジアの人々の抗日運動は、戦争とファシズムの支配に反対する国際的な勢力の一部であり、民族独立の基礎となった」という文が載っていたが、日本がアジア諸国を支配する欧米にはじめて大きな攻撃を成功させ、日本の活躍に勇気を奮い立たせ、民族独立につながったって認識していたので、どっちが正しいのかなんてないとしても、自分の考えと違っていて変な気持ちだった。（中）

こうした「対米自立：大国派」の意見や歴史認識の誤りを批判することは難しいことではないが、なぜこうした意見が広く受け容れられ、広がっているのだろうか。その要因について私自身まだ明確な考えを持ち得ていないが、彼らの反米観や嫌米観には、アメリカの一国行動主義の強まりと日本の際だつ対米追随の姿勢、東京裁判の問題点、「憲法押しつけ」の側面、９条と現実のズレなど一定の歴史的事実や現実が反映していることも否定できないように思う。したがって頭ごなしに批判したのでは逆効果であって、歴史認識の一面性を丁寧に批判しつつ、自分の頭で考えるよう、問題提起と情報・史料の提供を行う必要あるだろう。たとえば、憲法はアメリカに押しつけられたものかという点で言えば、「対米自立：大国派」の議論は、専ら占領―被占領・戦勝国―敗戦国という文脈を重視しているが、それだけでは不十分であって、①憲法第９条の世界史的意義（戦争違法化の流れ：国際連盟・パリ不戦条約・国連憲章）、②与えられた平和・民主主義なのか（戦前日本の自由・民主主義の伝統、小国主義、反戦運動）、③どのようにして日本社会に定着したのか（戦後平和運動など民衆の努力、国際法などの発展）といった観点も含めてトータルに把握する必要がある。

実は、こうした観点については、いずれも平和ミュージアムにおいて、（充分な展示かどうかは検討が必要だが）展示されていることに気付く。実際に、平和ミュージアムの展示からそういった点を読みとり、それをふまえて中間レポートで、「対米自立：大国派」の意見に対して批判を述べる学生も少なくない。反米・嫌米、「対米自立：大国派」の意見が急速に増大していることは軽視できないが、毎回のコメントカードや中間レポートで、こうした意見に対し多数の反論が寄せられたこともまた重要であるといえよう。丁寧な批判という点では、私が批判するより、学生同士の討論という形で議論した方が効果的でもある。学生間の紙上討論の一端をみてみよう。

例えば先に紹介した17)、18）の意見に対し

29）外交のために軍事力は必要だという意見に疑問を持った。極東が不安だから軍事力を持つ、そして相手国は対等では満足できず、それ以上の力を持とうとする。こうして軍備拡張が冷戦の時も行われたのだ。軍備拡張により戦争がなくなるとは誰も考えない。縮小が必要だ。「もしせめられたら」この仮定は誰もが抱く不安かもしれない。武力を持たずこの不安を解消する方法を探す努力が必要だ。(4/26コ)

30)「日本には軍事力が必要」や「話し合いで解決できないものを解決するのが戦争」という人も何人かいるみたいです。その人たちも戦争という方法には賛成しているけれど、人の命が奪われることには賛成ではないはずです。戦争によって得られるのは荒れた国土と悲しみを抱えた人々ばかりです。簡単に戦争は悪くないとか言ってほしくないです。(4/26コ)

また、24)のような戦争を肯定する意見については、翌週、批判の意見が一斉に寄せられた。

31）№2の左一番上の人の意見24）について、違う国同士で理解し合うのは難しいという部分は僕自身も賛成ですが、それを埋めるための手段が何故「軍事力」なのかと思うのです。ここに論理の飛躍があるのでは。(5/24コ)

32）戦争を甘く見るな！！あんたは戦争下におかれている国の子供たちがどんな目をしちょると思っちょーだ。彼らの体は子供だけど、目はすごい大人なんだけんなー。彼らははっきり言って大人です。戦争で心をやられた子供の目を見てください。戦争の意味が分かります。子供が子供じゃないんだぞ。戦争は政治でぼやかされているんだ。本質を自分の目で見てください。あなたにも目はあるでしょ。感情的な文章ですみません。(5/24コ)

33）感想を一通り見て背筋が寒くなった。戦争から五〇年足らずで『戦争を否定し平和を望む』というあたり前の考えに疑問を持つ人が生まれるとは…。彼らは一体何を学んできたのか。誰と接してきたのだろう。理屈で固めた文献で歴史や戦争を学んだのだろう。そこには戦争は見えたか。助けを求める人々の声をかき消す爆音は聞こえたか？負傷し生き延びようとはいつくばっている人を貫く銃弾は？見えたはずはない。聞こえたはずはない。何も学べていない。彼らは戦争の悲惨さを味わい平和を訴える人をどう思っているのだろうか？運が悪かったな…とでも思っているのだろうか。今回のことで改めて教育の大切さが身にしみた。(5/24コ)

これらに対して今度は、反批判が寄せられた。

34）5/24№1の左上から二番目32）と四番目33）の二人、君たちに言っておく。本質を見る目がない者、間違った教育を受けた間違った考えを持ち、間違った人間となっている者とは君たちのことだ！子供の目や銃弾におびえて助けを求める声や爆音に耳をふさいで、真実から目をそむけるな！君たちにはきっと自分を犠牲にしても守りたいもの、獲得しなければならないものは何もないのだろう。おそらく君たちは自分の家族や恋人が危険になったとしても自分一人逃げ出すのだろう。人や国家にはそれぞれの立場があり、守るべきものがある。奴隷の平和か誇りや自分たちの正当な権利を守るための戦争かを問われれば、君たちは誇りを捨て生を選ぶ。それもいい。私は誇りのうちに死ぬ方を選ぶ。(5/31コ)

今度は別の学生から34）への批判。

35）あなたの発言34）は正しいとはいえない。「真実から目をそらすな」というが、あなたの言いたい真実とはいったい何なのか。「何かを犠牲にしても」という言葉は軽々しくいうものではない。さらに「奴隷の平和か、誇りや自分たちの正当な権利を守るための戦争か」というのは過激にすぎる。確かに誇りは何よりも大切という考え方には納得できるが、一方的な見解や偏狭な考え方は極右派の特徴であり、他者の命を軽んじる傾向にあるのは否めない。独りよがりもほどほどにしておいた方がよい。(6/7コ)

36）思想家気どりブームでしょうか？私はコメントカードを読んでいて頭がおかしくなりそうです。…なんか、戦争を肯定することが「思想として受け入れられている」のって変ですよね？人を傷つけてはいけないとか、人に迷惑を掛けてはいけないとか…これって一般常識じゃないんですか？世界共通じゃないんですか？自衛隊派遣とか、テロとか、ルールを守れていなければすべて間違っているんじゃないですか。賛成反対の問題じゃないと思う。人間として考えたらわかることでしょうが。いい大人が何気なくというか、さらっとルール違反しているのを見ていて、本当にびっくりするというか、恥ずかしいというか…。コメントカードを読んでいたらまるで自分がおかしいかのような気になるけど、人が苦しむのを嫌うって普通の感覚ですよね。人を殺す事って犯罪でしょ。まじコワい。…戦争を完全に否定している私っておかしいですか？私は戦争否定の立場からものごとを考えるから、この授業についていけないと思うんです。この授業で扱っているいろいろな現実の社会問題を考えていくことは大

切ですが、その間違ったことを知って、反対するだけで十分です。…人を殺すことすら「思想」にすれば受け入れられるこの世の中って何なんでしょうか？かっこつけんな！！まじキモい！！（7/12コ）

また、私への反論をめぐって、学生間で議論となった。

37）史料における新聞の抜粋で以前から『朝日』『毎日』の左よりの主張を持つ記事が多すぎると思った。『朝日』と真っ向から対立する主張を持つ『産経』の記事が少なく思います。意図的かどうかわかりませんが、両方の記事を比較してほしいと思います。(6/7コ)

38）この授業は片方に偏りすぎている。我らのような意見ももっと出していただきたい。先生のお立場が片方によりすぎているので我々はあたかも「間違っている！」といわれているかの如く思想弾圧的である。また石原氏（私は大の支持者であるが）などへの個人への攻撃はいかがなものか。…それから日章旗が「間違った使い方」と言われるのは大東亜戦争（私は聖戦というが）が誤っていたと仰りたいのだろうか。諸説ある中でそれを前提にするのはどういうことか。(6/21コ)

39）僕はあまり先生の言うことが理解できません。僕は右翼ではありませんが、共産党は大嫌いです。…多分先生は中立・右翼の考えをハナからバカにしているような気がします。そのようなこと（憶測ですが）では人に語る資格はないと思います。きっと先生は提出された左よりのレポートににんまりしていると思いますが、みんな単位目的で表面的なことばかりですよ。先生の思想こそ対話した方がいいのではと思います。(7/5コ)

こういった私への批判に対して

40）6/21№１の左下の方38)、なぜアジア太平洋戦争が誤っていなかったといえるのか、日本が多くの国を侵略し、多くの人々を殺してきた。日本にとってあれが正しかったといえることがありますか。しかも日本は七三一部隊など人間的だとはいえないことを次々と犯してきた。これが正しかったことだという認識は世の中には全体としてありません。アジア太平洋戦争が正しかったというのなら、一般的にあなたの意見が偏っていると思う。あと、前から知りたかったが、あなたのような考え方の人は日本をまた世界を将来どうしたいと考えているのですか？何を目指しているのですか。(6/28コ)

41）この授業は偏っているという意見があったようだが、私はそうは思わない。もし本当に偏っているのなら毎回学生にコメントカードを書かせて賛成反対を紹介したりはしない。自分の考えに合う授業が偏っていなくて、合わない授業が偏っていると思っているなら、それこそ視野が狭い。先生の考えも一つの意見として見た方が良いだろう。(7/5コ)

以上は学生の紙上討論の一例であるが、「対米自立：大国派」が戦後の原点や対米追随の原点を占領や９条・東京裁判に求め、平和や民主主義をアメリカに押しつけられたものであるというのに対し、「対米自立：平和・９条派」の多くは、戦後の原点を戦争の反省に求め、そこから生まれた憲法第９条、平和・民主主義を高く評価している。また、憲法おしつけ論や「東京裁判史観」についても、平和ミュージアム見学もふまえて批判を寄せているのである。

「対米自立：平和・９条派」の意見を詳しく見てみよう。

42）憲法のめざしたものは、前文に明白であるように、諸外国との平和・友好を重んじ、国民に主権があること、全世界の人々が平和のうちに生存する権利を持ち、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということである。これは世界に誇れるすばらしい理念であり、安易に憲法を改正するようなことは絶対にすべきではない。平和ミュージアムでもいろいろ考えさせられたが、この憲法が制定されるまでには、戦争という苦しみや悲しみを乗り越え、たくさんの犠牲を払い、それによって二度と同じ過ちを犯さないという、大切な学習をしたわけである。しかもそれは、終戦からまもなく57年を迎えようとする今日にも通用する立派な歩みである。戦争体験者も少なくなり、悲しみや苦しみが時間の経過とともに薄れていく今日であるが、そこで学んだことは決して忘れてはならない。私たちは、原点と向かい合い、それを現在にも未来にも活かしていかなければならない。有事法制によって日本は再び戦争のできる国へなろうとしているが、私たちはそのことを真剣に受け止め、後で「だまされた」と騒がなくてもよいように、責任ある立場で考える必要がある。(中)

43）（平和ミュージアムで）一番興味をひきつけられたのは小学生の兵士へ向けた慰問文の内容で、きちんとした文章でありながら、あからさまにアメリカへの敵対心を表していて、また国に対しては異常といえるほどの愛国心を綴っている点が非常に不気味でした。普通に考えて、小学５年生があのような文章を書くにはかなり特別な教育を受けなければならないと思うのですが。ファシズム国家によるある種の洗脳に近

い教育が行われていたんだろう…結局ファシズムをつらぬいた国家はすべて滅んできたわけですが、まあ滅んでくれてよかったと素直に思いました。戦後政治の原点というのは、まずこのファシズムを否定するところからはじまってそれにごちゃごちゃといろんな法律がくっついてきた感じがします。（中）

44）この授業では多くの人々が今の日本国憲法というものは敗戦直後のGHQによる押しつけによってつくられたつまらないものだと思っているようではあるけれども、私はこの憲法は国民の多大な犠牲によって勝ち得た自由の碑とでもいえるのではないかと思う。もちろん今の形が完全だとは毛頭思わない。でも国民の義務や責務を定めて権利や自由を規制する法律を作ってそれをスムーズに機能させたいがために、国家権力の行使に歯止めをかけ人権を保障する憲法を改正しようとするようなことはあってはならない。（中）

45）当時から戦争反対を訴え、その主張を通そうと軍国主義と闘ってきた人たちがいたことを理解した。彼らはいち早く国際平和というものについて理解を示していたのだと思う。実は今日、日本国が掲げている平和主義というものは、終戦後からのものではなく、太平洋戦争が始まっている時点でその芽生えは始まっていたのだということを平和ミュージアムを見学して考えたりもした。（中）

また、両方の意見の間でゆれつつも、平和ミュージアムを見学して抱いた自分の感情をみつめようとする意見もあった。

46）戦前に日本は正しいのだと教育・メディアを使って煽られた軍国主義と同じように、平和主義もGHQによって作られ、次はこれが正しいのだと教育・メディアを使って生み出されたものだと私は考える。平和ミュージアムを見学し戦時中に平和主義を訴えた人らが政府によって弾圧されたのを知り、現在軍国主義を訴えると弾圧までいかないが批判されるだろうと感じた。戦前と戦後では軍国主義と平和主義がまったく逆になったように感じる。…しかし、戦時中の子供らの死体、原爆のキノコ雲、焼け野原の写真などを見たときの感情も、自分の考え、感情ではなく何かに影響されたものなのだろうか。私自身はあの感情は人類共通のものだと信じたい。戦争放棄・平和主義は人間の道徳に沿っていると考える。もっとも道徳こそ人間が作り上げたものかもしれないし、平和主義の教育を受けたからそう言えるのかもしれないが。（中）

また、「対米自立：９条・平和派」の多くは、対米追随の打開の方向を、歴史に学び、憲法の理念を活かして、日本が先頭に立って世界やアジアに平和を働きかけていくことに求めている。

47）日本がこれから進むべき道は、まずアメリカと対等な立場に立ち、軍隊としての自衛隊を捨て、コスタリカと共に世界にこういう方法もあるのだということを示す見本として働きかけることだと思う。平和主義国家日本は今傾きかけているが…コスタリカを見習いもう一度平和と民主主義の国日本を見直し再認識する時期を迎えているのではないかと思う。「敗戦の虚無感の中で日本国憲法を初めて読んだ時きらきらと輝いて見えて」「胸の高鳴りを覚えた」などの新聞の投書に載った文からも当時の状況が目に浮かぶ。決して押しつけられた憲法ではなかったはずだ。それから57年近く経つ今日まで私たちは戦争をしていない。（中）

48）戦争を経験していない、経済的にも豊かな社会で育ってきた私たちにとって、国際平和ミュージアムで学んだことは大きかった。戦前・戦中の人々の写真を見、どのような暮らしをしていたかを知って、ますます現代日本はいかに平和であり、「平和ボケ」は人間にとって素晴らしく幸せなことだと感じた。また、このレポートを書くにあたって本を読み、日米の従属的関係を少しづつでも改革していくべきだと思った。最近では、米国同時多発テロの影響で、日本も戦争に参加する形となってしまい、有事法制が国会で取り上げられている。国際関係の中で、アメリカからの干渉を全く受けることなく国を運営していくことは難しいが、日本は過去の戦争経験も踏まえて、自国の平和を守っていく必要がある。これ以上の犠牲者を増やしてはならない。（中）

49）日本国憲法の平和主義というのは、日本が戦争の加害者の側にも立った第２次大戦の悲惨な体験とそのことへの深い反省、不再戦の決意から生まれたものであって、アメリカに押しつけられた憲法の中にもそういった日本の意識が反映されているともいえます。そして日本に平和の道を歩ませるために民主主義を確立し、９条においていっさいの戦争を放棄しあらゆる軍備を保持しないことを定め、今の平和主義国家が誕生しました。僕は日本はこれから平和主義の憲法、民主主義の体制に自信を持ち活かしていくべきだと思います。今の日本の安全・平和が保たれ経済的に豊かな国になったのもこの憲法や民主主義のおかげだと思います。日本には世界の手本となるような国になってほしいと思います。そのために日本は戦争体験から学んだ多くのことを世界に伝え、日本が二度と戦争を起こすようなことがあってはならないのです。（中）

50) 国際平和ミュージアムの最後の展示パネルにノルウエーの平和研究学者ヨハン・ガルトゥング博士の言葉があった。「ある人が本来成し遂げることのできたはずのことが、実際に成し遂げられなかったとすれば、そこに暴力が存在する」。「現実」と「可能性」のギャップを生み出している社会的要因は「構造的暴力」とよばれ、それをなくすことが平和研究の目的だと氏は言っている。この視点の助けを借りれば、戦中戦後の連合国、特にアメリカの強い覇権意識の思惑から、ベトナム、朝鮮、そして日本もこの構造的暴力を押しつけられ、植え付けられてきた。平和ボケした現代日本の背後にある歴史的経過を見つめ直し、本当の意味で「独自」の視点・立場から「日本」の主張を発信すべきだ。(中)

51) (平和ミュージアムを) 見学し終えて私は戦後日本の政治は本当にこれでよかったのだろうかと改めて考えさせられた。…ベトナム戦争では日本は直接軍隊を送っていないものの、沖縄基地、食糧調達などでかなりアメリカに荷担していたことを知りショックを受けた。戦争の悲惨さをきっと一番知って、もう戦争はしてはいけないと主張している日本がベトナム戦争では重要な役割を果たした。さらにショックなことは、世界で核兵器をなくすことに多くの国が賛成したのに原爆で被害を受けた日本はアメリカと共に反対側についたことだ。私はアメリカと日本はこれまで世界平和より自らの利益のことばかりを優先していたように思える。しかし今からでもこれまでの政治を見直し、アメリカへの依存を切り、もっとアジア諸国に対し貢献すべきではないだろうか。(中)

5．むすびにかえて

以上、簡単ではあるが、私の拙い実践内容と学生の戦争観・平和意識の一端を紹介した。「対米自立：大国派」と「対米自立：９条・平和派」との間の論争の決着は講義中ではつかなかった（たかだか半年の講義で簡単につくはずもないが)、私に対する厳しい批判を寄せてくれた学生もふくめて共通の議論の場が形成され、活発な「紙上討論」ができたことの意義は大きかったように思う。やや「挑発」的に私の見解を打ち出すことで（こうしたやり方には批判もあろうが)、一定の問題提起となり、学生に対して、自分で考えるきっかけを与えることができたのではないかと考えている。一般教育としての最低限の役割は果たせたと思う。[(5)] 読者のみなさんからご批判をいただきたい。

学生はこの講義をどう受け止めてくれたであろうか。最後の講義では、半年間講義を受けての感想も記してもらった。

52) 最初は知識がなく、自分の意見を持っていなかったので感想が書けなかった。最近はこうしたい、こうすべきだ、許せないなどとはっきり書けるようになった。これは私だけじゃないと思う。回数を追うごとにカードは内容の濃い、熱いものになっていき面白かった。これだけでもこの講義は一定の成果があったといえるのではないだろうか。(7/19コ)

53) 私は前期の授業の中でこの「現代日本の政治」が一番好きで楽しみだった。毎回のコメントカードで他の人達の考えを知って、一つの物事に対してもいろいろな見方ができるんだなあと感じたし、大学生は勉強しないとかよく言われるけど、すごい考えていて大学生もすてたもんじゃないと思えてきた。自分もこれを機会にもっと政治に関心を持ち続けていきたいと思う。(7/19コ)

54) コメントカードを見ながらどんな意見にせよみんながきちんと考えているということはよいことだと思った。特にこのような政治的な事に関しては我関せずという若者が多い中、これだけの意見が出るということはとても大事なことだと思う（7/19コ)。

55) 本当のことをいうとこの授業はコマあわせにとったものだったのですが…授業の内容も進め方もとても興味が持てたし、何より知らないという自分がすごく恥ずかしくなってしまいました。コメントカードが白熱してて、その熱気にあてられたせいかもしれません。(7/19コ)

56) 先生はいろんな個人個人の意見に対してできるだけ肯定的に受け止めようと努力していらっしゃるのがよくわかりました。私みたいなただの18才の意見を評価してくださった時はとても嬉しく思いました。でももっと社会を知って大人になってからこの授業を受けたら、もっと楽しかったかなあと思い、少し惜しい気もします。(7/19コ)

57) とにもかくにも前期講義終了お疲れさまでした。授業の中身については賛成できる所、反対とおもう所様々でした（反対意見がちと多いくらいか）が、考える機会を頂いた内容ある講義だったと思います。(7/19コ)

58) 他のコメントカードを見て自分の考えの狭さに気がついた。特に戦争や自衛隊・有事法制の肯定意見は私にとって驚くことが多かった。でもどんな意見を聞いても変わることのない私なりの結論がようやくでた。それは「血を流して勝ちとった平和はいらない」

という事だ。武力による勝ち負けで正義なんてきまらない。きっとみんな私を含めて自分の考えが一番正しいと思っている。他の人の意見に耳を貸さない人もいる。でもこうした価値観のぶつかり合いが必要だと思う。私は自分のボキャブラリーや知識も乏しく自分の考え方やものの見方に自信がなかった。それが授業の中で磨かれてきた。もっと積極的に物事を知りたくなった。自分自身の姿勢の変化が授業で得られたものだろう。(7/19コ)

59）初めの頃は小林よしのりの戦争論にどっぷりつかっていました。先生の授業は左寄りだと思うことが多々ありました。特に僕は南京大虐殺に興味があり、前書を読んでこれはやっぱり存在しないと信じ切っていたのですが、先生が授業取り上げた本や自分でインターネットで戦争論に対する批判を調べて見ているうちに、彼の主張から抜け出せないでいた自分に気付きました。何が本当なのか自分で調べ、自分なりに理解することによってのみ分かるのだと思いました。これからも過去の歴史認識にたいして、同時に現在の政治について疑問意識を持ち続け自分の考えを持つことを大切にしていきたいと思っています。(7/19コ)

60）政治に関する知識が他の人より少ないということもあって、ちょっと講義が難しすぎたり、コメントカードには根拠のない自分の信念しか書けなかったりしました。でもやっぱり私は戦争反対です。戦争に賛成って言ってる人、自分が戦争に行くことなんて考えてないんじゃないかなって思います。…人間は誰でもみんな「自分」であることには変わりはないのであって、「自分」を守りたいと思う。そしたらやっぱり、戦争によって自分以外の「自分」が傷つくのって必ずいけないことになると思います。戦争がないことだけが平和だとは思わないけど、平和な世の中に戦争はあり得ないと思います。何で戦争が肯定されることがありえるのか。いろんな感想よんだいまでも謎です。…最後にこの講義で絶対戦争を否定している人がたくさんいるのを知って、まだ間に合うかなって感じはしました。(7/19コ)

61）コメントカードを読んで、今まで自分が考えもしなかったことを書く人がいたり、とても共感できることが書いてあったりして、とてもおもしろかった。もちろん自分の考えと全く違う意見にはムカツク(？)こともあったが、それも民主主義であるからこそできることでもあるし、それはそれで尊重しなくてはいけないと思う。一番大切なことは、いろいろな意見を見たり聞いたり実感したりする中で、いかに自分が考え、中立（？）な立場から物事を見ることができるかであると思う。(7/19コ)

もちろん講義に対する批判や要望もある。

62）生徒の意見をカードなどでとりあげるのはもちろんいいことだと思うが、僕の場合は基本的な知識がないので、先生がもっと説明する形が多くてもよかったと思った。(7/19コ)

63）はっきりいって8割近く何を言っているのかわからなかった。コメントカードを読んでいる時点から意味がわからなくなり、すごくつらかった。毎回出ていたが何もわからないまま終わった。先生が前でしゃべっているだけで、本当につまらなかった。これでレポートを書けといわれてもつらい。般教なのだからもっとわかりやすくやってくれないと困る。後輩や友人には絶対すすめたくない授業だと思った。(7/19コ)

64）もっとみんな生で意見を交わせたらいいと思いますが、これだけの大講義だとそれも無理な話ですね。(7/19コ)

65）先生の意見が片寄りすぎだという批判もありましたが、私は先生の意見と近い考えを持っているのでそんなに違和感はありませんでした。ただその分、先生に反論したりということができなかったのが少し残念です（笑）。(7/19コ)

また、学生への問題提起という点では、「紙上討論」とともに、平和ミュージアムの果たした役割も大きい。中間レポートでは、ミュージアム見学の感想として多くの学生が、①京都への原爆投下計画、②民衆の戦争動員・思想統制の実態、③戦前の立命館の歴史、④反戦運動・思想の存在、⑤戦争責任や加害の問題、⑥戦後の核開発やベトナム戦争における日本の役割、⑦平和概念：構造的暴力という捉え方、などを共通して挙げていた。とくに今回の中間レポートで多かったのは、平和友の会のボランティアガイドさんとの対話を通じて考えたことをレポートしてくれたものである。今の大学生は「私は戦争を知らない。両親も知らない。私の祖父母でさえも戦争当時まだ子どもで逃げまどった記憶しかないらしい」世代であり、ただ展示を見るだけでなくガイドさんと対話し、戦争体験をふまえた解説や問題提起を聞いたことは、貴重な体験となったようである。

66）見学してショックだった。昔の日本が外国と思えるくらいだ。僕はあるおじいさんから自分が満州にいた頃の話を聞かせてもらった。おじいさんは今の若者の平和意識の薄さを嘆いておられた。僕たちは後世に今もなお世界には数多くの核があると伝えていこう

と思う。(中)

67) 平和ミュージアムに見学に行ったとき、ボランティアである私の母よりも年上の人と30分ほど話をした。その方はこうおっしゃっていた。「人間は生まれただけではまだ人間じゃない。教育を受けたら人間になるの。ってそんなことをどっかの哲学者が言っていたわよ。でもやっぱり学ぶこと、知ることってすごく大切よ。この平和ミュージアムで色んな真実をしっかり自分の目で見て、そして自分の頭で考えてね」と。『無知は罪だ』と常々考えてきたが、この戦後政治の分野においてもまだまだ自分の知らないことが数多くあったし、今も未開の地に近い。しかし先生の授業を通し、それらの背景や真実を少しずつだが知るようになった。今後もその視点や知るスキルやツールを大切にしていきたいと思う。(中)

平和ミュージアムを講義の展開に合わせてすぐに利用できるのはたいへんありがたいことである。せっかく大学に充実した平和ミュージアムがあるのだから、これを活用しない手はない。今回はたまたま学生のコメントカードを受けて、平和ミュージアム見学を中間レポートに組み込んだわけだが、平和ミュージアムとの連携を効果的に行えるような工夫を今後も日常的意識的に行っていきたいと思う。

最後に平和ミュージアムへの要望をいくつか挙げておきたい。開館時間について。私の担当しているもう一つの講義である「平和学」は、夜間主コースの学生が対象である。この講義でも平和ミュージアム見学をレポートを課題としたが、わざわざ「仕事を休んで見学した」という学生が多かった。土・日開館しているのは大変ありがたいが、週一日程度でも開館時間の延長というわけにはいかないだろうか。複数の学生からは、映像資料の音声がうるさいので、ヘッドホンで聴けるようにしてはどうかという提案があった。

また、平和学や平和博物館関係者の間で「平和博物館」か「反戦博物館」かという議論があるようである。[6] 平和学のテキストもここ２、３年で相次いで出版されたが、[7]「積極的平和」「構造的暴力」という観点から環境問題やジェンダーなど必ずしも直接「戦争」に関わらないテーマに拡大している。そのこと自体は積極的な意味を持つのだが、その一方、日本の近現代史や戦争の問題が、過去の問題としてはもちろん、現在そして未来をめぐる問題としても、十分位置付いているとはいえないように思う。戦争責任問題や歴史教科書問題、靖国参拝問題、日の丸・君が代問題など近現代日本の戦争の歴史が、現代の争点となっていること、また、日本がふたたび「戦争をする国」になろうとしている現状などをふまえると、日本の近現代史をふまえて現代の戦争と平和を考えることの重要性、戦争がないという「消極的平和」が持つ積極性をあらためて痛感している。平和ミュージアムはあくまで「反戦博物館」として、いっそうの充実を期待したい。さらに「テーマ３　現代における戦争と平和」の展示部分についても、日本の戦後史の展開をふまえた、現代の課題と鋭く切り結んだ展示の工夫や努力をお願いしたいと思う。これは平和ミュージアムへの注文でもあり、近現代史研究者にかせられた課題でもある。

《注》

1　こうした意見は年々多くなる傾向にあるように思う。昨年の講義では、昭和天皇の戦争責任や沖縄メッセージについて言及すると、学生から「発言に注意されたし」という脅迫ともとれるコメントカードまで頂戴した。

2　なお、期末レポートは講義で扱ったテーマのうち１つ以上を取り上げ自由に論じてもらうこととした。テーマの内訳は次のとおり。日の丸・君が代問題64名。有事法制56名(賛成６、反対37、対米自立なら賛成９、慎重審議４)。９・11テロ38名。沖縄問題35名。靖国参拝問題28名（賛成８、反対20)。安保・米軍・自衛隊16名（対等な同盟へ５、廃棄６、維持２、不明３)。戦争責任・東京裁判15名、憲法７名、歴史教科書・新ガイドライン・核密約・天皇制各２名、東アジア共同体・湾岸戦争・コスタリカ・安保闘争ほか各１名。

3　反米観、嫌米観と日本の対米追随に対する批判の高まりは学生の間だけでなく、一般の世論調査でも確認できる。たとえば『毎日新聞』(2003年１月４日）によれば、安保肯定派は1/3強にとどまり、日米関係をイメージする言葉のトップは「追随」(30%）であるという。

4　WGIP（ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム）とは、新しい歴史教科書をつくる会などの主張によれば、GHQによる日本人の「洗脳」計画のことである。『新しい歴史教科書』扶桑社295ページには、WGIPという言葉は使われていないものの、「GHQは、新聞、雑誌、ラジオ、映画を通して、日本の戦争がいかに不当なものであったかを宣伝した。こうした宣伝は、東京裁判とならんで、日本人の自国の戦争に対する罪悪感をつちかい、戦後日本人の戦争の見方に影響を与えた」と叙述されている。この立場に立てば、日本の戦争は侵略戦争を行ったから不当なのではなく、GHQから不当だと罪悪感を植え付けられた結果にすぎないということになろう。

5　日本の学校教育、政治教育のあり方について、次のような意見もあった。「本当政治ってわかりにくい。高校でて大

学入ったけどまだよく理解できない。日本は民主主義とかいってるけど、実際にいい大学出たエリートの人しか政治に関わってへんのやないかなって思う。確かに政治をする人はかしこい人やないと困るけど、その他多数が意見を持つこともできへんような知識のなさやったら民主主義はなりたたない。私は小中学校９年間の義務教育で政治経済を数学以上に教えなあかんと思う。そやないと憲法違反やと思う。民主主義とか権利ありますよーとかいっときながら政治に参加できるだけの人間を作る教育をしない。英語やとか複素数やとかカエルの解剖やとかより大事な社会のことがちっとも重視されてへん。英語必要ない一般人も、化学結合しらんくても全然平気な人も政治は知らんとあかん」（7/19コメントカード）。

6　たとえば1998年11月に立命館大学国際平和ミュージアムおよび大阪国際平和センターで開かれた第３回世界平和博物館会議では、「平和博物館」の定義や「反戦博物館」との関係が議論となった。『平和をどう展示するか―第３回世界平和博物館会議報告書―』（1999年３月）第１部「平和博物館とは何か」所収の各論文を参照のこと。たとえばヨハン・ガルトゥングは基調講演「平和の理論と平和博物館における実践」の質問に答えた中で、やや極端な言い方と断りつつ、「平和博物館にとって戦争に関する情報は、全く必要ないか、あるいはそれほど必要ないわけです」と述べている。この会議には筆者も参加したが、そこで感じた違和感について、大阪の歴史学会などでつくる平和博物館問題協議会の研究会（1999年７月27日）で簡単に報告したことがある。機会があれば、詳しく論じてみたいと考えている。

7　たとえば、岡本三夫・横山正樹編『平和学の現在』法律文化社1999。岡本三夫『平和学―その軌跡と展開』法律文化社1999。臼井久和・星野昭吉編『平和学』三嶺書房1999。高柳先男『戦争を知るための平和学入門』筑摩書房2000。池尾靖志編『平和学をはじめる』晃洋書房2002、『平和学がわかる。』AERA Mook朝日新聞社2002など。

（筆者　立命館大学非常勤講師）